人吉球磨地域在宅医療情報誌

だんだんなあ

Vol.3
2015年2月25日発行
発行：人吉球磨地域在宅医療拠点事業

地域包括ケアシステムを共に

人吉市健康福祉 部長
松岡　誠也

介護保険制度は、少子高齢化、核家族化時代の高齢者介護を社会全体で支えるものとして平成12年に発足し、3年ごとに計画を更新してきました。

平成27年4月からスタートする第6期で、特に重点的に取り組みたいと考えているのが、「地域包括ケアシステム」の構築です。地域包括ケアシステムとは、住み慣れた地域で人生の最後までいきいきと暮　らすために、医療・介護・介護予防・住まい・生活支援の5つを包括的に提供することを言います。具体的には、在宅で暮らしている高齢者を支えるため、地域の医療機関、介護施設、町内会、老人クラブなどの団体や、かかりつけ医を中心に薬剤師、看護師、ケアマネージャー、介護福祉士などの専門職が連携して、地域の民生委員などと協力しながら、在宅生活全般について包括的に支援していくことになります。そして、その基盤を整備し、後方から支援していのが市町村と地域包括支援センターの役割です。

高齢化のピークと言われている2025年に向けて全国で取り組むととなる事業ですが、高齢化が進展している本市にとって、早急な体制構築が喫緊の課題です。推進のためには、地域医療に携わる皆さんとの連携が必須であり、医師会で取り組まれている「在宅医療拠点事業」と医師会の有志で立ち上げられた「在宅ドクターネット」の活動は、地域包括ケアシステムと方向性を同じくするものであり、大変心強く思っているところです。

市の総合計画で目指している「笑顔があふれ、幸せいっぱい　健康福祉都市ひとよし」実現のために、地域包括ケアシステムをともに実現したいと願っています。

ホームページ「だんだんなぁネット」開設のお知らせ

報告

当事業の公式ホームページ「だんだんなぁネット」が開設されました。各種講座やイベントのなどの最新の情報を掲載しています。

「だんだんなぁ」とは球磨弁で『ありがとう』を意味する言葉で、人吉球磨地域在宅医療拠点事業が運営するサイトです。「事業概要」や、本事業の活動の流れなどを知ることができます。

他に「施設検索」「外部リンク集」などを掲載し、情報誌「だんだんなぁ」のダウンロードも可能となっています。PC･スマフォ両対応ですので、是非アクセスしてみてください。

http://www.dandanna.net/

報告　在宅医療推進のための市民公開講座

人吉市カルチャーパレス　平成 26 年 1 月 31 日（金）

「在宅医療」制度を啓発推進する市民公開講座が1月 31 日、人吉市のカルチャーパレスで開かれました。当事業に取り組む人吉・球磨郡両医師会の主催で、淀川キリスト教病院の柏木哲夫理事長の基調講演や、地域の有識者による「在宅での生きざま・死にざま」の座談会などがありました。

講演に先立ち介護職員らで構成する認知症啓発劇団「しゅんなめじょ」が出演、寸劇を通して在宅医療制度をＰＲした他、「ＩＴ紙芝居」による在宅医療の実際を紹介しました。

柏木哲夫先生の講演「死を背負って生きる」では、豊富な経験に裏打ちされたお話に参加者が熱心に聞き入りました。

引き続き行われた座談会「在宅での生きざま･死にざま」では、柏木先生をコーディネーターとして、地域の有識者５名のパネリストが登壇し、それぞれの立場から在宅医療への展望を語っていただきました。

講演に先立ち上演された「寸劇」と「ＩＴ紙芝居（右）」

柏木哲夫先生からの熱いメッセージ

柏木哲夫先生の講演「死を背負って生きる」では、『弱っている人に、「頑張れ」などの安易な励ましは好ましくない。相手の言葉を聞き、「それは辛いね～」など同調する言葉を返し、また耳を傾ける。すると会話が続く。反対に、話を打ち切りたいなら「頑張れ」と言えば良い。』、『人は生きてきたように死んでいく。我が儘な人は我が儘なまま死んでいくし、感謝して生きた人は感謝して死んでいく。つまり死に方は、生き方と言える』、『私たちは生まれた時から死を背負って生きている。まるで紙の表裏に「生」と「死」があるように。そしてそれは、いつか逆転する』などと語られ、その深いメッセージに多くの参加者の胸を打ちました。

【柏木哲夫先生プロフィール】1965 年大阪大学医学部卒業。1972 年淀川キリスト教病院に精神神経科を開設。翌年日本で初めてのホスピスプログラムをスタートし、1984 年にホスピス開設。現在、金城学院学院長・淀川キリスト教病院理事長兼務。

また、ドクターが一人の人間として患者と向き合い、心を越えた「魂のケア」の必要であることも付け加えられました。

現場からの報告があった座談会

「在宅での生きざま・死にざま」と題した座談会では、柏木先生をコーディネーターとして、緒方医院院長 緒方俊一郎氏、人吉医療センター緩和在宅医療センター長 西村卓祐氏、熊本県訪問看護ステーション連絡協議会 人吉球磨ブロック 堀之内明子氏、人吉市健康福祉部高齢者支援課課長 瀬上雅暁氏、球磨圏域介護支援専門員協会会長 尾方洋平氏ら５名のパネリストが登壇し、自分の仕事と関連づけて現場からの声を報告されました。

在宅医療先進地区の安成英文氏に聞く②

昨年 10 月 23 日（木）、「球磨人吉在宅ドクターネット」が主催した記念講演会に講師としておいでいただいた在宅医療先進地区「たまな在宅ネットワーク」の安成英文先生に設立の経緯と現状をお聞きしました。
（聞き手・球磨人吉在宅ドクターネット理事）

安成英文先生
プロフィール

福岡大学医学部卒。福岡大学筑紫病院勤務を経て、医療法人木生会 安成医院 院長。平成 24 年、在宅医療連携事業を立ち上げる。玉名郡在住。

Q：地域での活動範囲と看取りの実際についてお聞かせください。

安成：個人開業医は自分の守備範囲から始めるしかありません。頑張っても中学校区の範囲だと思います。文化的なところでは地道にやるしかないのではないかと思います。

独居で最後は自宅で看取れることもありますし、それをどうやって知ってもらうかという事も課題です。

他の地域の例ですが、特養の施設で亡くなれた方のお葬式で弔辞を読まれたスタッフは、特養での過ごし方を紹介し「最後の最後はこういう方でした」と話されたようです。このようなフィードバックはとても大切なことだと思っています。

在宅でも、ただ亡くなったという事だけでなく、どうやって一生を終えたかという物語を共有できる場があった方が良いなと思っています。いわゆる町単位ではこのような事が可能かなと思います。

Q：特に困った事例とかありましたか？

安成：楽観的な性格なので余り感じたことはありません（笑い）。ただ医者同士のコーディネート、連携が難しいですね。訪問診療のオファーがあった時にまず主治医に確認することが大事で、主治医を飛ばして他のところから話が来たら要注意です。

掛かりつけの外来診療の延長にある訪問診療が一番自然な関係じゃないかと思います。訪問診療を希望される方にはまず話を聞いてみて、話が合わなかったら一覧の中から選んでもらいます。患者とドクターとの相性の問題もあるので、「重装備」なんだけど、こういう患者がいるけどどうだろうかと呼びかけて、ドクターに手を上げてもらうのがスムーズにいくのではないかと思います。

Q：往診していない主治医から往診している主治医への交代とか、副主治医を決めるのはドクターがしているのですか？

安成：あてがうということはないですね。手を上げてもらう、選ぶのは患者さんか、ご家族です。事務局があてがうわけではありません。コーディネイトするだけです。データを元受けから取って、手を上げてもらうために、どこどこの在宅のこんな人がいますので、どなたか主治医になってくれませんかと出すだけです。紹介するのは事務局、手を上げるのはドクターですね。

Q：看取りが近くなった時の対応はどのようにされていますか？

安成：年間数例ですが、今日行けないなと思った場合、必要時に募ります。問題は患者家族の受け入れですね。突然知らない医者が来るのは困るので、事前に資料を見せて了解を得ています。殆ど場合、このサポートに対しては、心強いと言ってもらえます。

看取った場合の往診料は、間接的に頼んで保険請求してもらうようにしています。現在までに19人くらい看取っています。そんなに頻度があるわけではありません。

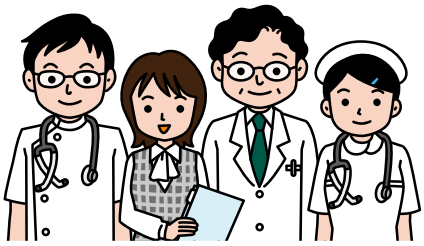
Q：在宅への連携とは、病棟でいろんな先生が診るように、それを地域で在宅を兼ねた医者として関わっていくという感覚でやっていけたら良いのかなあと思うのですが。

安成：まさにその通りですね。

Q：先生が考える 10 年、20 年先の目標にされていることは何でしょう？

安成：私が思うシステムは誰が在宅を行っても変わらないパフォーマンスを出せることが理想です。新しく開業されたドクター、でもそのシステムに乗れるようなことをしていかないと、広がっていかないと思います。地域に関わりを持って、助け合えるようなシステムであったら良いなと思います。

Q：今日は、ありがとうございました。



報告

平成 26 年度在宅医療連携事業　先進地視察研修

福井県坂井市　オレンジケアクリニック　H 26.11.14（金）

今回、人吉市・球磨郡医師会よりお声掛けをいただき、在宅医療連携拠点事業による先進地視察において、去る平成26 年 11 月 13 日～ 14 日、福井県での視察に参加させていただきました。人吉市・球磨郡医師会へ心よりお礼申し上げます。

福井県の坂井地区は福井県北部に位置し、石川県境のあわら市と坂井市で構成されている。坂井地区医師会の医師会員数は 90 名。診療所 52、病院7、（内･外科 32、整･耳･眼・皮科 14・産・小児科6）。訪問診療、往診の割合は、訪問診療 59%、往診のみ９%、開業医の 68%を占めている。以前から在宅医療に取り組む医師が多かった事もあり、医師会が中心となり、福井県の「地域における在宅医療体制の整備」モデル事業として、在宅医療コーディネート事業委託を受け「坂井地区在宅ケアネット」を発足。医療、介護の一体的な高齢者在宅ケアのモデル構築を進めている。

その中で、①医療と介護の多職種間で活用可能な患者記録様式の利用とクラウドコンピューターを活用したＩＴシステム（患者情報共有システム）の運用を試行。タブレット端末を配布し訪問先でも在宅情報共有システムの情報が閲覧できる。システムは、高齢者一人一人に掲示板が割り当てられ、その高齢者に関わるスタッフだけが閲覧・記載が可能となっている。情報の記入者は情報の種類によって異なり医療情報は医師・看護師が記入し、ＡＤＬ、介護情報はケアマネが記入する。記入に先だっては、高齢者本人に情報共有の範囲を確認し同意も得ている。システム利用者数は１０２事業所。主に在宅主治医、訪問看護師、ケアマネがシステムによる情報を共有している。システムの負担は広域連合で負担。民間事業所はインターネット利用するための経費のみ負担。②在宅主治医をカバーする副主治医選定ルールと病院によるバックアップ体制を組み合わせた在宅医療システムの構築。主治医が高齢な患者に対応できない場合にサポートできる役割として副主治医を選定。選定条件としては、高齢者の居住地で活動している医師であること、家まで確実に往診できることなど、いくつかの選定ルールが設定されており、医師会に所属するコーディネーターが具体的な人選を行う。副主治医は基本的に診療所の医師が担い、診療所の主治医の役割に厚みを増すことを目的としたものである。③「顔の見える多職種連携会議」による、医療・介護連携の強化。地域の在宅医療に関わる多職種が一堂に会する場として、多職種連携カンファレンスを開催。第一回は「多職種連携をするうえで大切なこと」をテーマとして開催され相互理解を深めた。④市民が自発的に在宅ケアを学ぶための普及啓発等、協議会内の組織として活動が行われている。

「みんなの保健室」でのセミナー風景
（同クリニック Facebook ページより）

市町を実施主体として在宅ケアの具体的な事例や地域ごとの医療、介護サービス等を学ぶシンポジウムや講習会、出前講座を開催。内容としては、「今、なぜ在宅医療なのか、利用方法、本人に寄り添い、在宅で看取ること」等で在宅ケアの具体的な利用事例や地域住民による支え合いの大切さを知ってもらえるようＤＶＤや紙芝居、寸劇で実演されている。

現在、医療技術や機能が発達しただけでなく、訪問診療、訪問看護、リハ等、利用者を取り巻く環境や地域のサポート体制も少しずつ整いながら、在宅でもできることが幅広くなってきました。しかし、自宅でも安心して生活できる事に対する啓発はまだまだ不足しており、いかに浸透させていくかが重要である。そして、特定の主体だけが苦労するのではなく、様々な主体が関わりながら進めて行く協力体制と、地域住民の目線に立って事業を展開していくことが求められている。私たちの地域でも、これから、行政や医師会、各関係機関との連携を深め、人吉球磨地域に見合った体制づくりができるようにみんなで貢献できればと思います。

（りゅうきんかの大森さん）

今年度の主な出来事

・第1回球磨地域在宅医療連携体制検討会議（H26.10. 2）
・人吉球磨在宅ドクターネット設立総会（H26.10.22）
・人吉・球磨在宅ドクターネット主催講演会（H26.10.23）
・在宅医療先進地視察　福井県坂井地区（H26・11.13 ～ 14）
・ホームページ「だんだんなぁネット」開設（H26.12.1）
・「在宅医療」制度を啓発推進する市民公開講座（27.1.31）
・情報誌「だんだんなぁ」発行（H26.10・12）（H27.2）

編集・発行
人吉球磨地域在宅医療連携拠点事業
〒 868-0037　熊本県人吉市南泉田町 72- 2
人吉市医師会館内
電 話 0966-22-3065　FAX 0966-22-3073